

第4回森林環境教育・木育のあり方検討会 議事概要

日時：令和2年7月3日（金） 13:00～16:00

場所：栄町庁舎第51会議室

検討事項

森林環境教育・木育ビジョン（仮称）中間案提示

1. はじめについて

三重県の特徴として「自然が豊か」であることを記述するとのことだが、同時に台風や豪雨等による災害が発生し、脅威になることにも触れてほしい。人間が手を抜くことで脅威は増すことから、人間の積極的な関与が必要なことをよりはっきりと示せると思う。また、生物多様性が高いこと、三重県の自然は地域性が豊かなことも記載すべき。

ビジョンにおいて、「皆が同じ方向を向き」といった言葉をあえて盛り込むのは逆効果。自然に「そうだよね」と思ってもらえる内容にしてさえあれば、あえて強調する必要はない。

2. ビジョンの名称「みえの森人育ビジョン」について

「森人」とすべて漢字で書いてしまうと、海人（うみんちゅ）や「守り人」のように森の中に住む人のイメージが強すぎるのと、また読みにくいことから、「森びと」の方が標記としてよいのではないか。

学術的には、「森林教育」に収れんされつつあるが、硬さがあるので、「森人育」は良いのではないか。

「育」とすると、「育む」「教育する」のように受け身イメージがある一方、「育」には「育つ」の意味もあることから、主体性を強調する活動を指す呼称としても良いと考える。

自ら学ぶというニュアンスを入れるため、「森人学」もいいかもしれないが、何らかの学問分野の名称のようになってしまう。「森人まなび」はどうか。

3. みえの森人育（仮称）で育みたい人について

「知っている」という言葉を使っているが、もう少し先に進んで、「価値に気付いている」あるいは「分かっている」という言葉遣いの方が目指すレベル感としては適切ではないか。

単に「森林に関する職業」とあると、たいていは「林業」くらいしか連想されないと思うので、「林業にかかわらず」といった表現が欲しい。例えば、森のようちえんの保育士なども森林に関する職業として想定されるような広がりがあった方がよいと思う。

「郷土への愛着を持っている」だけ、他の育みたい人とトーンが違うので、表現を工夫されたい。

文科省の学習指導要領では「生きる力」となっているところ、三重の教育における基本方針では「生き抜いていく力」としており、より主体的な言葉となっている。また、自己肯定感を育むことは三重県の子育ての柱でもあるので、これらを意識して、ビジョンへ反映させるとよい。

三重県人が対象のビジョンであるが、三重県外の人から見た三重県の姿も意識して、「県外の人にもうらやましがられる」三重県人という観点が欲しい。県民自身が、県外の人からうらやましがられていること、三重県の、自分の住んでいる地域の強みに気付いてほしい。

4. みえの森人育で大切にしている3つの要素について

中間案資料にあるぐるぐるの図は良いと思う。年輪のイメージを背景に置くのは良いが、線は一本でつながっている方がよい。

「自ら行動できる人になる」を最終目的地としているが、「行動」もぐるぐるの一ステップに含めてぐるぐるした結果、より大きな行動につながるとした方がよい。

5. ビジョンの実現に向けた取組について

学習指導要領に対応したプログラムは、プログラムの活用研修受講後、教育現場ですぐに活用できるものであるとより活用されやすい。また、プログラムに地域性が盛り込まれ、学校の実情にあっていると使いやすい。

プロの言葉は、子どもの印象に強く残る。単発のプログラムや取組であっ

ても効果がないわけではない。

学校で森林環境教育・木育を行う時は、プログラムの内容、目的を、学校と講師（森のせんせい等）とで、一致させることが重要である。

中学校、高校等で、林業職業体験を行うと、山が身近にあっても、山の中で何が行われているか知らなかったのが、山の中でどんな仕事が行われているか知れてよかったと、よく意見をいただく。

保育士、教諭に対する研修は、希望者向けとならざるを得ないかもしれないが、受講者に地域的な偏りがでがちなので、工夫が必要かもしれない。

自由研究は、ほとんどの小中学校で夏休みの宿題となっているので、森に関する自由研究をサポートできる仕組みがあると、森林環境教育・木育の広がりには効果があると思われる。

森林所有者には、森林や林業への関心がなく、所有森林の場所さえ分からないという方が増えてきているので、森林所有者向けのプログラムも必要ではないか。

介護施設等に入所されている方向けの、施設内外でのプログラムを作っただけでいい。特に、施設外でのプログラムは、入所者の安全確保が課題であるが、入所者に良い影響を与えることができると思われる。

森林産業と医療との連携の可能性は高いのではないか。

産業界が森林環境教育・木育に関わっていくためには、講師等としての正当な対価が必要である。担い手の確保や木材消費を増やすためにも、森林環境教育・木育が大切であることは承知しているが、ボランティアとして講師等を務めるのは困難である。

6. その他

林業は、産業界での横のつながりはもとより、林業外とのつながりも希薄であり、もっとさまざまなところとつながっていくことが必要。その場合には、関係者等が共通の目標を持つことが重要である。

例えば、木造・木質化された小学校に通っている児童は、中学校や高校が鉄筋コンクリート構造だとあれっと思うと思う。木造・木質化された空間が当たり前である環境を整えることが、重要ではないか。

林業は、目立たない山の中での仕事なので、林業の盛んな地域でさえ、林業がどんなことをしているのか知らない住民が多くなってきている。林業は今、それほど一般の方から距離が遠い仕事になってしまっている。

林業に関わるの人たちは、自分たちの仕事を知って欲しい、認めてもらいたいという思いが強い。

ビジョン作成にあたり、三重まるごと自然体験構想との関係性を整理すべき。